



道 程

山 添 清

季節の移ろいの中で

浅い流れの川面が陽光にキラキラと輝いている。

対岸の間知ブロックの高い護岸から歩道へと続く法面に、若いスキの穂が秋の気配をおびた川風にゆったりと揺れている。何十年ぶりの暑い暑い夏だった。身体が暑さについていけず、無気力にただダラダラと過ごした夏だった。そんな暑さもやっとなやわらいで、遅めの秋がやってきている。

そんな川沿いの道を、二十数年、電動車椅子を走らせている。週に一度のリハビリに行く通り道。いつも見慣れている風景なのに、時として、なぜか新鮮で記憶に残るような光景に出くわす。もしかすると、そのスキは毎年秋になると、今と同じようにやさしく穂を揺らしていたのかもしれない。ただそれに気付かなかっただけで、たまたまこの時の心のもちようが、いくぶん軽やかで、車椅子を走らせながらも周りに目をやる余裕があったからかもしれない。

振り返れば、わたしは交通事故で障害者となった当初、それまでの日常の暮らしが普通に送れなくなった現実と、それまでに築きあげてきたすべてを喪失したことで、長い歳月を絶望の中で過ごした。すべてにおいて無気力でふさぎ込む生活を送っていた。精神的な余裕なんてひとかけらもなかったし、逆に自死を企図するような状態だった。しかし、時の流れの底では、そんな時期においても、現実を直視する小さな芽が育まれていたのかもしれない。しだいに前を向けるようになって、障害をもって生きる覚悟も少しずつ醸成されていった。人は不幸のどん底に突き落とされ転げまわりながらも、いつかしら一縷の希望の糸を手探りで探しているのかもしれない。人生最大の悲しみだと思っていたことさえも、時が経てばじんわりと憂いをもって懐かしく思い出せる日が必ず来るようにできているのだろう。

とはいえ、日々の暮らしの中では不便や不自由なことは多かれ少なかれあって、そのたびに苦悶の波にもまれて揺れ動く。しかし、このように自然の表情や季節の移ろいの中に人知を超える大きな力を感じては、自分の心の浅さと非力さと情熱の足りなさを責めるような心持になるのを繰り返すのだった。それでも、このような波があってもどうにか障害を受け容れ、日々の暮らしの中で、自分らしく生きる価値を見出すことができたのは、心優しい人たちとの出会いがあったからである。

出合い その一 片麻痺の母を介助する女性

障害をもって生きた人生は、すでに健常で生きた人生の半分くらいになった。もしかすると、この寿命が尽きるころには健常の歳月と同じくらいの歳月を障害をもって生きているかもしれない。しかし、今は、障害をもって生きること不幸に思っているかというところでもない。外出を躊躇する私を半ば強引に連れ出してくれた人、障害者、しかも自分より重度でかつ主体性を持って生きている人たちとの出合い、そして、リハビリで関わりをもった療法士たち、その他心優しい人たちとの出合いによって、障害を受容し、障害がけっして人間の価値を下げる負の資質ではないという意識の転換ができたから。それによって健常時とは違った幸せを獲得できたから。

最初に出会った人は、始めて間もないインターネットだった。脳梗塞で半身不随になった母親を介助する女性で、その母親が創立したカルチャースクールを引き継いでいた。母親を介助していることもあって、障害をもつ者の心情や苦悩をよく理解していた。メールをやり取りするうち、お互いの家を行き来するようにもなった。

そして、桜の花が咲き始めたうらかな春の日に、彼女が住む区営の、伊香保にある保養所への一泊旅行に誘ってくれた。躊躇する私を無視するかのように、私を介助する男性までも手配して、半ば強引に連れ出してくれたのだ。四人で行くこの旅行は、私にとって受傷後はじめての外出でもあった。しかも、家族が同行しない単独での参加で、まさに清水の舞台から飛び降りるくらいの勇気が必要だった。伊香保のその保養所は、区が買い取った旅館をリニューアルしたもので、館内での車椅子移動にも支障はなく、バリアフリーの部屋も二部屋用意されていた。浴場には車椅子タイプのシャワーチェアが備えつけられ、浴槽にも手すりが設置されていた。受傷後初めて大きな家族風呂での入浴を経験した。夕食時には持参した洋酒も飲んだ。食後にはカラオケにも興じた。大きな不安だったトイレや車椅子での移動も忘れるほどだった。

翌日には榛名富士を湖面に映す榛名湖や、歴史を刻んだ杉並木の幽深な榛名神社を周遊した。

受傷前に訪れたことがある伊香保温泉を、こうしたかたちで追体験できたことによって、勇気をだして行動を起こせば多少の不便さが伴っても、健常時と同じような体験ができることを学んだ。

半年後にはやはり四人で行く伊豆半島への一泊旅行にも誘ってくれた。半島の海辺に沿うように走る曲がりくねった国道は、突然、秋の日差しにきらきらと輝く大海原が見えたかと思うと、すぐに濃い緑の木々のまにまに見え隠れする。健常時に見たのと同じ風景がそこにあった。悠久の自然は相変わらず大きな包容力で迎い入れてくれる。障害を忘れ、生きていることの素晴らしさを実感させてくれた。

宿泊した伊豆高原のかんぼの宿には、電動ベットが備えられ、その真上の天井には浴室へと続くリフト用のレールが設置されていた。世の中にはすでに障害者に配慮したこうした施設や設備があることを知った。己の障害と向き合うだけの狭い領域から、障害者全般に配慮する外の世界へと足を踏み入れた瞬間でもあった。

翌日には、半島の先端近くの海中公園にも足を運び、障害を深く意識することなく遊んだ。

このふたつの経験によって旅行することの不安が楽しさに変わり、障害者が旅行する上での情報も得ることができた。

行動を起こす最初の一步はこうした強引ともいえる強力な支援がないとなかなか踏み出せない。彼女には心から感謝している。

その後、彼女とはかなりの期間不通になったが、フェイスブックで再び繋がった。残念ながら母親は亡くなられていたが、これらのことが私が障害者として生きる出発点になっている。

出合い その2 重度の障害者たち

伊香保温泉や伊豆半島の旅を経験したことで、外出に対する抵抗感や障害者という卑屈な感情も薄れていった。障害があっても自分らしい生き方を漠然ではあるが模索するようになっていた。

そんなある日、ブログで知り合った、障害をもつメル友からメールリンクへの誘いを受けた。彼女は障害歴も長そうだったが、ねほりはほり聞くことは憚られたので、それ以上のことは知らないままであった。ただ、障害女性でありながら障害者の送迎を請け負う移送サービスを手掛ける事業主でもあることは、彼女のホームページで知っていた。わたしは受傷前に小さいながらも会社を経営していたので、起業することの大変さを知っていた。女性で、しかも障害がある身であり

ながら起業していることに驚嘆した。世の中にはこんなすごい障害者もいるんだと。初めて会った時の彼女は、車椅子ながら清楚ではつらつとした女性だった。

そんな彼女が紹介してくれたメールリンクの仲間は、他に女性一人男性三人であった。みんな障害歴の長いベテランといった感じで、悲観的な書き込みはほとんどなく、旅行、しかも海外のどこどこに行くといった書き込みが多かった。しかし、その仲間とは直接会ったこともなかったもので、障害の程度とか風貌などは知る由もなかった。

ところが、それから半年が経った頃、その仲間と行く韓国釜山への旅行に誘われた。ある大学の観光学科を卒業して旅行会社に就職した人が主催したものだ。その企画は、後輩の観光学科の学生を障害者旅行の実習と称して同行させる、一泊二日の強行な旅行だった。

冬の気配が忍び寄る晩秋の冷たさを含んだ空気が漂う中、私とメル友は、彼女が運営する障害者送迎用の車で成田空港に着いた。空港の待ち合わせ場所にはすでに全員がそろっていて、簡単に自己紹介を交わした。

三十歳くらいとおぼしき女性は、旅行のときは常に一緒だという同世代の介助役の健常の女性と参加していた。単独で参加する三十代の男性は、両親と営む障害者施設の役員で、母親に空港まで送ってもらったという。そして、リーダー格の五十代の落ち着きのある男性は、旅なれた様子で主催者との打ち合わせに余念がなかった。男女七名の学生ボランティアたちは、それぞれ五人の障害者に割り振られた。わたしについて二回生の男子学生は、父親が私と同年で、来年度は休学して世界を周るつもりだと話した。旅行中ずっと行動を共にした。

受傷後初めての飛行機はかなり勝手が違っていた。搭乗は他の乗客よりも先だったし、降機は一番最後であった。成田ではボーディングブリッジから、機内用の車椅子に乗りかえて座席に着いた。座席は通路側で窓外の景色は望めなかったが、かつて何度も乗ったソウル行の航路とほぼ同じコースで、山陰地方から日本海に抜ける下界の風景を脳裏に映しだしては、フライトの追体験をかみしめていた。

釜山空港では、施設内の移動経路の一部に階段があったりして、空港職員による人力で下りた。

空港で乗り込んだバスで、そのまま市内観光をし、夕刻には街をそぞろ歩きした。軒を連ねる店には、さまざまなクリスマス用品が煩雑

に陳列されていて、早々とクリスマススの雰囲気満ちていた。そういえば、韓国では仏教徒についてキリスト教徒(プロテスタント+カトリック)が多いと聞いたことがある。なるほどと思いつつ、かつて、ソウルのミョンドンの上の丘の上にたたずむ大きなカトリック教会を訪れたことを思い出していた。

街路灯や店の灯りが輝きを増すころ、人出はさほど多くないその商店街の通りの真ん中に、不規則な間隔で屋台が並んでいた。屋台にはビールケースに板をのせただけの簡素なテーブルに、やはり同じようなビールケースをイスにして、チヂミなどをアテに客が思い思いに酒を飲んでいる。私たちもそんな屋台のひとつでチヂミを買い、ちぎり分けて歩き歩き食べた。そんな夕暮れの異国の風情のなかに、車椅子の自分がいるという現実の、不思議な感覚を覚えている。

夕食は宿泊するホテルで摂った。この時はじめて、参加者の障害程度を知ることになる。ホークやスプーンを使って不恰好ながら自分で口に運ぶ人、金属製の、手の甲の部分で輪っかになったホークやスプーンに手の甲を差し込んで器用に使っている人、装具も使えず介助者に口に運んでもらっている人など、ほとんどがわたしより重度の障害者だった。特にリーダー格の男性は、食事やトイレが全介助だった。そんな彼が何の気兼ねも見せず、自然体で介助を受けている様は衝撃的だった。トイレは人間の尊厳に関わることなのに・・・そのときのわたしは、他人によるトイレ介助はとも抵抗のあることだった。それを目の当たりにして、なんて強い人なんだろうと感心した。いかにも、そんな身体に好きでなった訳ではない、自力で出来ないのだから人の手を借りて生きていくしかない、といった開き直りに似た強い意志が伝わってくるようだった。

あとで私を担当した学生に聞いた話だが、彼には障害に関する著書があり、その本が大学の図書館にあったことで交流が始まったとのことだった。この旅で、障害があってもそれを受け入れ、強く生きる人たちがいることを知った。同時に自分の弱さ、障害に対する甘えを痛感させられた。

これまで他の障害者と交流することがなかったので、この経験はとても貴重だった。自分以外の障害者のことを知ることは、障害者として生きていくうえでもとても大事なことだと痛感した。「井の中の蛙

大海を知らず」で、自分の障害と向き合っているだけでは未来の展望がない。

後日、リーダー格のその人が、国際線開設に向けてリニューアルされた羽田空港のバリアフリー度を、新聞記者とともに検証している写真つきの記事を目にした。

翌日は朝早くから街や魚市場を散策した。釜山は、受傷前に、ソウルからセマウル号で慶州を経て訪れたことがあったが、車椅子で行く街は、その時の印象とはまるで違っていた。

韓国の大都市の道路はとても幅広い。北朝鮮とは休戦状態にあって、事態が動けば戦争にもなりかねない。戦時には道路が戦闘機の滑走路として利用されるようだ。そんな事情もあってか、道路を横断する電線も見かけないし、信号も少ない。したがって横断歩道も少ない。道路は地下道で横断するようだ。さて、車椅子ではどうするのかと注意深く見回すと、階段脇にエスカルが設置されていた。主催者に聞くと、当地の障害者が申請するとエスカルのカギが貸与されることだった。しかし、我々にはカギはない。主催者は階段を下り、しばらくして男性二人を伴って上がってきた。階段を下りた先が地下鉄の改札口にもなっていて、その駅員を連れてきたのだった。男子学生と駅員とで車椅子五台を階段下までおろし、反対側の階段を再び人力で抱え上げた。地下鉄を利用するわけでもないのに、この親切には感動をおぼえた。

太平洋戦争敗戦の暗い影を引きづっていた私が子供の頃には、朝鮮人に対する差別的感情が色濃く残っていた。市内には朝鮮人が住む地域があり、朝鮮部落と呼ばれていた。戦争によって植民地支配から解放された朝鮮人が、それまでの人種差別的怨念を晴らすため、日本人の民家の井戸に毒を投げ込むといった噂さえ聞いたことがあった。人種差別も甚だしい時代もあったのだ。

足早に観光して、午後の飛行機で帰国した。成田の入国審査の際、審査官がパスポートを開くなり、一泊で帰ってきたのですか、と聞いた。予期せぬ質問だったが、隣国のそれも一番近い都市であっても、車椅子の障害者たちが一泊の強行軍で旅行するなんて、審査官にしても想像できなかったのかもしれない。しかしわたしは、この強行軍に耐えうる体力があることに自信を得たのだった。

後日、釜山旅行の打ち上げと称して、横浜の中華街で参加した障害当事者だけの食事も、その都度テールブルが別だったり、隣り合う人も違ったりしたので、その場だけのありきたりの話しかできなかったのだ。

この食事で、初めて彼らの日常生活や想いを知ることになった。釜山では、食事の際も、その都度テールブルが別だったり、隣り合う人も違ったりしたので、その場だけのありきたりの話しかできなかったのだ。

一番若い女性は、横浜で一人暮らしをしていて、バスを利用して毎日通勤しているという。重度の障害がありながら一人暮らし。なんて強い人だと改めて思いつつ、通勤時のバスの運転手や他の乗客に気を使って疲れることはないかと聞くと、もう長年のことだし、このバス停で車椅子の人が乗ることは運転手を含め乗客のおおかたも承知しているのです、それは無いという。そういうものかとますます感心してしまつた。そして、自宅アパートの玄関は、一人でも出入りできるようにと、後付で自動ドア装置を取り付けているという。これを聞いて、私も家人の手を煩わせることなく一人で出かけられるようにと、聞いていた業者に依頼したが、我家の玄関ドアには設置できなかった。

リーダー格の男性は、離婚歴があり、障害に関する著書や講演などで生計を立てていると言う。中華街へはスロープ付きの軽のワンボックスカーで来ていた。運転は同年代の女性で彼女だといった。こうした福祉車両を目にするのも初めてだったが、重度の障害者で外出機会が多い人にはこういった車が必要なんだろう。それにしても、行動を共にする理解ある伴侶がいるなんて恵まれているなあと思つづく思つた。重度の障害者でどうしても介助が必要な人は、言動においておのずと人を引きつける魅力を身につけていくのかもしれない。

こういう会合での中華の大きな円卓は、大変都合が良い。誰とでも向き合う形で話ができる。

この時の話題の中心になったのが、出版されて間もない、河合香織著の「セックスボランティア」という本だった。マスコミでも取り上げられ話題になっていたので、わたしも購読していた。内容に比べて

タイトルが赤裸々で刺激的と思ったので、そういうと、売るためには必要ではないかと一蹴されてしまった。

著者は、障害者の性についての著書が多い。この本は、国内やオランダなどで取材したノンフィクションで、日本で実際にセックスボラティアをしていたという女性にも取材している。その内容とともに、実生活での性に対する思いや苦悩など、突っ込んだ話もあった。

こういう話を本音で語り合う場に居合わせたのは初めてだったので、戸惑いもあったが、本音で語り合う彼らを見ていて、これが感情に素直な本来の人間の姿なのではないかと思われた。実際、障害者であつても生身の人間なのだ。障害によって身体的機能が失われても、人間の本能はいかんともしがたい。話を聞いているうちに、「性」は当事者にとつてとても大きな問題なのだと認識させられた。こういうわたしも、その満たされない感情が全く分らないわけではない。

障害を受け容れ、たくましく生きているようにみえても、その奥には人いえぬ苦悩を宿している。

彼等との出会いによって、障害をもつて生きる日々の暮らしを知恵と工夫でより良いものとする努力、本能には逆らえない生身の人間としての満たされない気持ちなど、日々の暮らしに立ちはだかるさまざまの問題が存在することを学んだ。障害があつても寿命が尽きるまでは生きなければならぬ。ならば、人生の最後まで、自分に逆らわず、ありのままの自分を大切に生きていこう、といった開き直った覚悟みたいなものができたような気がした。

出会い その3 ネパールの岸本さん

わたしは、新聞を読むときは一面から読み進める。もちろん、流し読みもあれば、見出しだけでスルーするときもあるが、時間をかけて読むほうだ。

ある日の朝刊の「顔」という囲み記事に、「多くの子に学ぶ喜びを」というタイトルで、ネパールで小学校を運営する車いすの詩人岸本康弘さんが、おだやかな笑顔の顔写真とともに取り上げられているのが目にとまった。

記事は・・・

いつも使う机の上に、長さ3センチほどのちびた鉛筆が一本置いてある。黄色の軸に消しゴム付き。「ネパールの教え子は、指で支えられるぎりぎりまで削って使う。それがいとおしくてもらってきました」同国の観光都市・ポカラで、貧しい子どもたちのために私財や寄付約七百万円を投じて建てた学校が、昨年秋に学校法人に。その取り組みが評価され、市民の社会活動を顕彰する「シチズン・オブ・ザ・イヤ―」を受賞。賞金百万円も学校の運営に充てるつもり、「不況のこの時期、天の助けのように思える」。

一歳で脳性麻痺になり、学校へは通えなかった。将来を案じた父から「おれが死んだら、お前も死ぬ」とさえ言われたが、独学を続け、通信制の高校、大学を卒業。「一人でも、何でもできる」と自信を深め、世界五十か国を訪ねた。ポカラで出会った十六歳の少女が、時計さえ読めないことに衝撃を受けたのは五年前、ネパールの識字率が低いことを知り、学校建設を決意した。

「重い障害がある僕でも、底辺にいる人間を少しは引き上げられる」ということです、とやり甲斐を感じている。

児童は約百六十人。三階建ての校舎からはヒマラヤ山脈が見える。一年の半分ちかく現地に滞在して絵を教える。校長先生は、四月からまた学校に赴く。「子どもたちはおおらかで、僕も車いすで目線が低いから親しみやすいようです。宮沢賢治みたいになれたらいいなあ」と照れた。

・・・とある。

当時の岸本さんは六十一歳。わたしより九歳年長であった。そんな氏が、車椅子で五十か国を巡った。そして、行きついた国で時計も読めない少女と知り合った。たったそれだけで、私財と寄付で、学校建設を実行する。普通、可愛そうだと思っても、その国の経済や教育行政を批判するだけで、実行に移す人なんていない。

その記事を読んで、漠然とではあったが、生きる価値を模索していた当時の私の心に強く響いた。初めてのことだったが、新聞社に連絡先を教えてもらえないか電話した。記事は関西本社のもので、そこから連絡先を教えてもらった。ちょうどネパールから帰国したところだった。電話に出た岸本氏の声は明るかった。新聞を読んで連絡したこと、自分も障害者であること、そして、あなたの生きる強さと行動

力に心が震える思いがしたことを伝えた。なにかに打ち込んでいる人の言葉には、情熱と充実感が包み込まれている。話しているだけで元氣になれた。

この電話をきっかけに、手紙での交流が始まった。

ネパールでは、学校で絵を教えたり、家庭訪問をしたり、常に子供たちに寄り添っている。そんな子供たちに囲まれた車椅子に乗る笑顔の岸本氏の写真が、航空便で送られてくることもしばしばだった。なかには、初期の卒業生から結婚式に招かれ、満面の笑顔で新郎新婦と納まる写真も送られてきたこともあった。

交流がはじまって数年後、ネパールでは王制が崩壊し、民主化された。それに伴い岸本学舎も公立の小学校として再出発することになった。これをきっかけに、岸本氏は学校運営からはなれ、子供たちの学用品支援にまわった。最近では、高齢による身体の衰えを嘆く手紙も来るようになった。もっとやりたいことがあるのだろう。意思に身体がついてこない。はがゆい気持ちもあるのだろう。それでもがんばるという。岸本氏は今年で八十一歳になった。

わたしは、岸本氏の己の生きる道を自ら切り開いたバイタリティと情熱に大いに感心し、刺激を受けたが、私にはそんな行動力や情熱はない。だが、岸本氏との十五年に及ぶ交流によって、障害は閉ざされた闇の世界ではなく、その周囲には生きる希望に繋がるたくさんの扉があり、その扉を開くのは自分自身だということを教わった。これが、障害者として生きる人生の指針となって、自分の能力と行動力の範囲で、実現可能で生き甲斐が得られるものを模索するきっかけになった。

自己再生への一步

このような出会いによって、障害者という湿り気を帯びた重い気持ちだが、あたかも霧が薄くなるようにゆっくりと晴れていった。とはいえ、これからこの身体でどう生きていくのか、日々の暮らしの中に生き甲斐につながるようなものをどう見出ししていくのか、かいても見

当がつかなかった。健常の時はアウトドアのものを趣味としてきた。それが一変、身体機能を失ったことで、インドアで出来ることを模索したが思い浮かぶものは何一つなかった。

そんなある日、リハビリ室の入口の壁に、雪をまとった富士の写真が、大きな額に納められて掛けてあった。それを見た時はただ、ああ富士、と思っただけだったが、リハビリが終わって、受付に向かうたびに目につくようになった。そのうちに、もしかすると写真だったら外に出るきっかけになるのではないか、と思いはじめた。とにかく外に出るきっかけになるものが欲しかった。引きこもりがちな日々の暮らしを変えるような何かが必要だった。

リハビリの時、担当の療法士に、あの富士山の写真は誰が撮ったのか聞いた。リハビリに通っている患者さんだという。しかし、残されたわたしの身体機能でカメラが操作できるのだろうか。しばらく悩んだが、担当の療法士を通して撮影者にコンタクトをとってもらった。撮影者のリハビリの時間におじゃまして、わたしの残存機能で撮影可能な方法があるか検討していただいた。カメラの保持は、カメラを一脚に固定すれば可能。シャッターもリリースというコード付きの押しボタンを利用すれば、これもなんとか可能とわかった。案ずるより産むがやすし、やはり行動に移さなければ何事も始まらない。さっそくレンズがセットになった標準型の一眼レフのカメラを購入した。

こうして、天気の良い日にはカメラを首から下げて外に出るようになった。

この地へは受傷して三年後に転居した。玄関から車椅子で外に出られる立地に、自分の残存機能で可能な生活動作に対応した造りの家を新築した。

この区域は、小さな街道の両側に奥行のない住宅街が連なり、その南側には小さな川が流れている。その川沿いの一部には田んぼや畑があつて、田園の風景の面影が垣間見られる。秋が深くなると、上流の奥に真っ白の富士山が鮮やかに遠望できる。畑は小高い丘に連なっていて、その稜線にはこれまた細長い林が、さらに南側に広がる広大な新しい街とを隔てるように横たわっている。そんな風景が新鮮で、日々の変化や季節の移ろいをカメラに収めるようになった。そのうち、撮り溜めた写真をブログで公開するようになった。

実は、パソコンはすでに使っていた。受傷後の絶望期、闇サイトで致死に至る薬物を売っているという情報を得て、それを手に入れるべく導入していたのだ。完全に生きる気力を無くしていた時期だった。インターネット接続が従量制で、かなりのお金を使ったが、結局そのサイトを見つけたすことは出来なかった。

それから数年は、撮影を兼ねた散歩で日が過ぎていった。そのうち近隣の写真は撮り尽くした感がして、気持ちが悪くなってきた。しだいに、機会を見つけては家族の協力で、日帰りの遠出や旅行をするようになっていった。カメラは常に帯同して、行った先々の風景はもちろん、車椅子で使用できるトイレや、宿泊する宿の設備も写真に収めるようになっていった。

そうしているうちに、それら写真を有効に利用できないかと考えるようになったが、漠然としたものが常に頭の隅でもやもやしているだけだった。

Reborn・新たな旅立ち

あしあと その1 情報発信

暑い夏がやっとやわらぎはじめた初秋、いつものようにリハビリに行くとき、担当の男性療法士に女性の実習生がついていた。大学四年生で最後の実習だという。リハビリを受けながら話しているうちに、車椅子使用者が交通機関を利用して移動する状況を見たことがないという。実習期間中に三人でどこかへ行こう、ということになって、開業したばかりの東京スカイツリーに行くことになった。それなのに、肝心の実習生は、大学や住まいがスカイツリーとさほど遠くない距離にあるということとで現地で落ち合うことになった。移動状況を見たいという本来の目的は果たされなかったが、近辺を車椅子で動き回る様子はかろうじて見せることはできた。

担当の療法士とは、最寄りの私鉄の駅で待ち合わせた。そこで、持参したデジタルカメラで、目的地までの全行程の移動状況の写真を撮ってくれるよう頼んだ。これがのちに自己再生の大きなきっかけとなる。

撮影は、改札口での駅員への対応依頼、車椅子対応トイレの設置状況、駅構内のエレベーターなどの移動機器、乗車下車状況、乗換状況などできる限り多くを撮ってもらった。電車に乗る機会はそれまでにあったので、それ自体には不安はなかったが、地下鉄の不案内の路線があったので、それがちょっと気にはなった。

最初の乗換駅のホームで、見知らぬ若い女性が軽く微笑みながら近づいてきた。わたしは面識がなかったので見て見ないふりをしていたが、同行の療法士とあいさつを交わしている。なにっ、とあっけにとられてみると、後輩のA療法士だと紹介された。わたしが知らないうちに、誘われて同行することになっていたという。彼女も車椅子使用者が交通機関を利用するのを見るのは初めてといった。予期せぬ出会いであったが、のちにこれが運命的な出会いとなる。行程の写真は彼女に引き継がれた。

開業間もないスカイツリーはかなりの人出で混雑していた。ところが到着した昼ころには、台風の接近によりエレベーターが運行中止になり展望台には上がれなくなった。どうしようか……。六三四層のスカイツリーは、建物四階の広場から広角のレンズで覗いても画角に納まらない。そこでテレビで何度も映し出されていた撮影ポイントへ向かった。その橋からは川面に映る逆さスカイツリーと、青空に白い雲を浮かべた大空に突き刺さるようにそびえる姿が撮影できた。撮影後スカイツリーに戻り、遅めの昼食をソラマチで摂り、帰宅の途についた。

スカイツリーへの一連の行程が写真撮影されたことで、画像を多用した分かりやすい外出情報の発信ができるのではないかと、それまでの漠然としたもやもやから一気に具体的なイメージが湧きあがってきた。とにかく、もっと情報を集めようと、社会福祉協議会をとおして同行してくれるボランティアを紹介してもらった。休日になると、そのボランティアさんと連れ添って、人気な公園や歴史的街並みの残る町へと取材に出かけた。時には特急電車に乗って、他県の国宝になっているお城に出かけたこともあった。

こうして集めた情報がある程度まとまったのを機に、二〇一二年十二月、車椅子での交通機関の利用法や近隣のお出かけスポットをまとめた「交通機関・お出かけスポット編」をメインに、「車椅子お出掛け応援サイト」と銘打ったホームページを開設した。

その後も情報収集のための取材や旅行を続け、関東地方を中心とした「観光・宿泊施設編」をまとめ、追加発信するようになった。

ところが、こうした外出情報が必要な対象者には、引き籠もりがちな高齢者が多い。しかも、そういった高齢者でパソコンを持ち、操作できる人はごく少数に違いなかった。そこで、サイトの情報をまとめ、冊子の制作を思いついた。サイトと同様、「交通機関・お出かけスポット編」と「観光・宿泊施設編」を冊子にして配布した。延べ二〇〇冊あまり。これはかなりの好評を得て、その情報を参考に、外出や旅行をする人がひとりふたりとあらわれた。その後、生活圏である地域の情報が一番重要ではないかということで、「車いす散歩編」を追加した。

こうした活動が周囲に知られるようになるにつれて、やりがいと同時に責任感も生じたが、日々の暮らしの中にやるべきことが見つかったことがなによりうれしかった。障害をもって生きるこれからの人生の方向性を見い出す第一歩となったのだ。

あしあと その2 フォーラム

これまでリハビリを担当してくれたU療法士が配属替えになった。スカイツリーへの同行でサイト開設のキッカケを作ってくれたり、フォーラムでのポスター発表等、新たなわたしの方向性を後押ししてくれた人だった。

後任の担当になった療法士は、スカイツリーへ向かう乗換駅のホームではじめて会ったあのA療法士だった。

私鉄のその乗換駅は、路線の分岐駅でもあった。スカイツリーからの帰路、私たちはその駅で別れる。ホームを隔てて向かい合うように停車していた電車に、彼女は乗り換えた。双方の電車はしばらくのあいだ扉を開けたまま停車していた。向かい合う乗降口に立った彼女とは見合う形になった。間が持てず軽く手を振ると、彼女も胸の前で小さく手を振った。それ以降一年ほどの間、会うこともなかったのだ。

長い期間にわたるこれまでのリハビリにおいては、差しさわりのない世間話が多かったが、彼女とはリハビリテーションに関することや障害をもった人の心理など仕事に関することから、人生に関すること

まで話しするようになった。そのころ、わたしもリハを受ける当事者の立場からリハビリテーションを考え始めていたし、サイトの情報発信だけには物足りなさを感じていたもので、その辺りで波長が合ったのだろう。療法士と患者の関係を越えて、互いに進むべき方向の模索がはじまった。

オリンピック開催が東京に決まってから、「医療と介護と地域をつなぐ会」フォーラムの主催者から会場が集中するお台場方面へのアクセシビリティ調査の依頼が来た。そこで、地元からお台場までの交通機関による移動ルート状況をカメラに収めることになったのだが、そのカメラマンの役をA療法士が引き受けてくれた。これがAさんの初めての協働だった。

往路は私鉄と地下鉄を乗り継いで、ゆりかもめに乗った。わたしはゆりかもめに乗るのは初めてだった。東京湾の奥まった臨海部を俯瞰するように走るゆりかもめの車窓からは、きらめく海に浮かぶ大小の船が見渡せた。船を見るとロマンが掻き立てられる。わたしは幼い頃から船が好きで、外航船の船乗りになるのが夢だったのだ。身体的な事情でその夢はかなわなかったが。

眼下に竹芝栈橋が見えた時には、はるか遠くなった青年期に、友人たちと伊豆大島に遊んだことが思い出された。夜遅く出港する船底の、油臭さが充満する大部屋で雑魚寝した。その旅の映像が脳裏でばらばらと捲られて、若かりし頃の自分がフィードバックする。

障害者として取材に来ているのに、そんな回顧が障害者という意識を消してしまふ。

下車駅が決まっていたわけではなかったので、国際展示場正門駅で下車した。ちょうど国際福祉機器展が開催されていたのだが、最終日のしかも終了時間間際で駆け込み入場した。

復路は、JRを乗り継いだルートをとったが、新橋駅での駅員の手際良さには感心させられた。国際展示場ではしばしば障害に関するイベントが開催されるので、障害者の対応に慣れているのだろう。ただ、この駅にはエレベーターが設置されていないのが悔やまれる。

この取材によって、大型ポスター3枚でアクセシビリティの発表をすることができた。これをきっかけに障害者の心理や障害受容について、やはり「医療と介護と地域をつなぐ会」フォーラムで共同口述発表をしたり、A療法士が属する学会のイベントに参加したりと、なに

かにつけ連携するようになって、リハビリテーションや自分とは違う障害についての知識も増えていった。このフォーラムでのポスター発表は数年続いた。

それによって、障害者自身やそれを取り巻く環境にも意識が向くようになって、今後の自分の進むべき方向性がなんとなくみえるようになっていった。

あしあと その3 勉強会

「あなたが作成した情報冊子をいただけませんか」。

突然、見ず知らずの人から手紙が届いた。「そちらには年に一、二度行っています」と書き添えてある。差出人は福岡の人。だれ？、どうしてわたしのことを知ってるの？。狐につままれたようで啞然となっていました。リハ時に、この名前の人が知っているかA療法士に尋ねると、作業療法に関する著書がある人だという。しかし、住所を教えたのは私でないという。では誰が……。後日分かったことだが、その方と関わりのある車椅子のKさんと分かった。

その福岡のHさんが、わざわざ上京して、「医療と介護と地域をつなぐ会」フォーラムで座長を務める機会があった。わたしもそのフォーラムでポスター発表をしていた。そのフォーラム終了時にHさんと初めて挨拶を交わした。Hさんとは、その後も療法士と障害当事者との研修バスツアーでもご一緒することになる。

挨拶を済ました後、このまま打ち上げをしようということになって、わたしとHさんを仲介した車椅子のKさん、療法士のAさん、Uさん、それに大学で教鞭をとるK先生の六人で居酒屋に集まった。

そこで、リハビリテーションの勉強会を提案したら、賛同していただき、二〇一五年六月勉強会が発足した。発足してしばらくすると参加希望の療法士が増え十名を超すこともあった。

勉強会では、発表者を持ち回りとし、発表者にとっての課題をスライドにして発表し、それに対する参加者の意見や事例で検討する、という方法をとった。療法士は臨床における患者との向き合い方など、

障害当事者は、後遺障害の受容など、療法士と患者との貴重な意見交換の場として機能した。

この勉強会はわたしにとってもとても貴重な経験となった。自分の障害を省みる機会になったし、なにより、発表時のスライドの作成は障害者にならなければ経験できなかったことだ。わたしの学生時代はコンピュータそのものが一般的ではなかったし、受傷前の仕事でも使うことがなかったのだ。お蔭で、その後のポスターや会報作りに非常に役立った。

しかし、この勉強会は、参加する療法士たちが忙しくなり、開催日の調整が困難になって、二年ほどで中止になってしまった。

あしあと その4 車いす散歩の会

こうした出会いや学びを重ねるたびに、新しい自分が上書きされていったが、同時に、健常時とは違う障害者としての自分の人生をどう構築し充実させていくのか、価値をどのような形で表出していくのか、生きた証しとして何が残せるのか、に思い悩むことも深くなくなった。健常時に積み上げた実績と比較するかたちで、課題として大きくのしかかってきたのだ。

ひとつの形として、情報を基盤とした引きこもりがちな障害者（主に車椅子使用者）の外出支援を考えるようになった。

リハビリテーションや障害者の問題について学習していくうちに、ホームページで情報を発信するだけでは実際の行動になかなか結びつかないのではないか、との疑問が生じていた。実際、発信している情報量に比較して、その情報をもとに外出や旅行をしたという声が少ない。情報はあくまでも情報であって、知識にはなり得ても行動には結びつかないのではないか。行動に結びつけるにはどうしたらいいのか。しばらくの間、思い悩む日を過ごした。

思考を重ねるうちに、A療法士にも協力していただき、趣味趣向を主体にした同好会設立のアンケート調査してみることにした。これには、五名の方から回答を得たが、関心はあるが参加したいという方は一人もいなかった。

次に、情報交換や憩いの場としての交流会設立で再度アンケート調査を試みた。これには二名の方の参加希望が寄せられた。これにより、わたしを含めた障害者三名とA療法士の四名で、二〇一五年十二月交流会が立ち上がった。二回目の交流会では、交流会の開催日や今後の方向などが検討され、それをホームページでも発信することにした。この交流会のホームページでの発信は、思いのほか効果があり、世田谷区のNPOから三名の参加も得ることができた。

そして、当面の課題として、ADLに関する諸問題への作業療法士の対応策、生活圏の商業施設や生活関連施設の情報発信、リハビリテーションや介護保険に関する情報をホームページで流すとともに、イベント開催なども視野に入れ、引きこもり解消につながる地域密着型の交流会を目指すことを確認した。

その活動方針に従い、二〇一六年四月、車使用者三名、介助者一名、療法士四名、看護師二名の計十名でお花見会を催すことができた。こうして、会としての活動がかたちになり、一步を踏み出した。

月例の交流会では、会の運営やイベント開催についての討議が主な議題だが、その後の雑談が思いのほか重要なものとなった。雑談では、参加者は思い思いに発言する。その中には、生活の工夫や知恵が含まれていて、他の参加者の参考になって生活に取り込まれたりする。また、外出した時の移動手段や行った先の情報なども語られる。これらの情報は、当事者でないと出てこないもので、わたしにとっても貴重な経験となった。

こうした交流会を重ねていくうちに、当事者の参加も増え、五名がレギュラー的に参加するようになった。また、他の療法士も随意で参加するようになり、患者の日常生活を垣間見る機会となっている。こうして、イベントも春の花見につづいて、秋にはBBQ会も開催するようになった。今では、花見やBBQといったイベントには十名を超える当事者、介助者や支援者を含めると三十五名に達する人たちが参加するようになった。このことは、外出の機会や楽しみの場があれば引きこもりがちな人でも出てくるようになるということである。この機会の創出がいかに大事かを認識させられた。

また、こういったイベントの最大の効果は、当事者と療法士や看護師といった医療者との交流親睦もさることながら、当事者がイベント

の運営や進行ばかりでなく、自分たちで出来る作業は自分たちでするといった主体性と協調性が持てたことだ。そして、参加するために利用する交通機関にも慣れて、主体的で自由な移動ができるようになったことだ。最初は不安で誰かの同行を必要としても、二、三回目になると単独で利用できるようになる。それによって普段の生活においても、買い物や娯楽など自由意思による行動半径が格段に広くなる。なかにはS U I C Aを利用して、行きたいところへ自由に出かけられるようになった人もいる。こうした発症前の追体験できるようになったことで障害に対する負の意識も薄くなり、地域の中で、自分らしい生活を営めるようになっていく。

こういう成果を目の当たりにすると、この取り組みの有効性が認識でき、同時に私の内面の充実度も深まってくる。人のためだけではなく、自分の生きがいのための取り組みとして自己評価できれば、障害者として生きた人生の大きな痕跡となるだろう。

I d e n t i t y わたしはわたし

私は受傷後およそ五年間、絶望の淵をさまよった。当時のことを思い返すと、ずいぶん長い期間を立ち直ることもなく生きる屍として過ごしたものだと思うけれど、いま考えると、むしろ時間をかけて自分が普段考えることのなかった生死の問題に触れることができたことで、それはそれで今の自分にたどり着くまでに必要な道のりだったのかもしれない、と思う。

そんな苦悩の期間を含めて、このような経緯で私は自己再生を果たすことができた。未知の世界で、未知な事柄に出会うたびに、それらに対処することで、未知の自分が引き出されていく。どんなに小さなことでもそれが形となれば自己評価でき、その評価が次のステップへの原動力となって、新しい自分が上書きされていく。これができたのは、ひとえに心優しいたくさんの人たちとの出会いによる。彼らの協力や支援、生き様をみさせてもらったことで、日々の暮らしの中に居場所や生き甲斐を見つけ、自己再生をはかることができた。

特に、わたしのリハビリテーションを今でも担当してくれているA療法士とは運命的であった。勉強会や車いす散歩の会は彼女の協力なしにはできなかったし、彼女の成長に刺激されてわたしも成長できた。

おかげで、わたしは充実した障害のある人生を歩くことができていた。至極当たり前のことだが、人生の途中でどんなことがあっても、わたしはわたし、なのだということを改めて実感している。「障害がある」という「事実」は変えられないけれど、「障害がある人生」はいくらでも変えられるのだ。こうしてわたしは今、健常時とは違った幸せの中にいる。これまでに出会ったたくさんの人たちには感謝の念が堪えないし、これからの出会いも大切にしていきたいと思っている。

わたしは中学生の時に知った高村幸太郎の詩、「道程」を人生訓としてきた。

僕の前に道はない

僕の後ろに道はできる

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守ることをせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

はたして私の後ろに道はできるだろうか。

わたしも高齢とよばれる年齢になった。それでも、人生の最後まで、目的と情熱をもって自分らしさを大切に、前に進んでいこうと思う。今はまだ、旅の途中。